

『宇治拾遺物語』

— その独特な世界 —

西 垣 内 智 子

目 次

序 論

一、成立時代について

二、編者について

三、編集方式——成立過程について

四、文学的統一性について

結 論

序 論

『宇治拾遺物語』は総数百九十七話から成る説話集である。「こぶとり爺さん」などの親しみ深い民話を収め、芥川龍之介の歴史小説の原典となっている説話を含み、成立以来多くの人々に親しまれ愛されている。

しかしその中身は、『今昔物語集』をはじめ、『十訓抄』、『宝物

集』、『古事談』等の、他の説話集と同じ題材を扱ったと見られるものが大きなウェイトを占めており、『宇治拾遺』にしか取られていない題材のものは百九十七話中五十四話という少なさである。

この数字はいかにも『宇治拾遺』の創造性の乏しさを示すようであるが、実際に『宇治拾遺』を読んだ者は決してこれを模倣の文学とは言わないであろう。——それは、『宇治拾遺』が一種独特の世界を形成し、私たちを魅了してやまないことがわかるからである。

池辺実氏は『宇治拾遺』から感じられる独特の世界を次の様に表現しておられる。

「『今昔』を読んでから『宇治』を読み終えたあとの印象が余りにも違い過ぎるのはなぜであろうか。やはり『宇治』にだけあって、『今昔』にない何かが流れていることは確かである。」（『宇治拾遺物語』編者の「目」について）

「『宇治』の説話の中には、簡単に消閑の具と言いつつしまうことのできないもの、笑いに包まれた何か潜んでいる。説話の背後に何か光るものがあり、そこからおのずかにじみ出るも

のが感じられる。」(『宇治拾遺物語』の批判意識について)
『今昔物語』と読後感が違うのはなぜか、『宇治拾遺』に潜む「何か光るもの」の正体は何であろうか。この『宇治拾遺』の秘密を解明するためにその独特な世界を色々な角度から探ってみよう。

本論

一、成立時代について

『宇治拾遺』の成立年代に関しては長い間研究が続けられ、たくさん論文が発表されている。それらはほとんど、『宇治拾遺』と他の先行説話集との関係を吟味し、『宇治拾遺』の成立年代を明らかにしようとする方法で行われている。先ほども少し触れたが、『宇治拾遺』の中身を見ると、百九十七話のうち百四十三話に典故が指摘されている。そのうち、文章までほとんど同一とみられる「同文的同話」は、『今昔物語』との間に八十二話、『古本説話集』と二十二話、『古事談』と二十二話などが数えられる(『日本古典文学大系』『宇治拾遺物語』説話目録)。ゆえに、その類似性の度合いからどちらが先行のものであるかを究明し、『宇治拾遺』の系列を明らかにして、成立年代を導き出すという方法がとられているのである。

特に「建久御巡礼記を論じて宇治拾遺の著述年代に及ぶ」で後藤丹治氏が『古事談』が『宇治拾遺』の先蹤であることを論証され、『宇治拾遺』の原作年代を建暦二年から承久三年まで十年間とし、

一旦成立したのち、原作者か後人かに増補されて現在の形になったのであらうとされた説などが、注目を浴びている。

しかしこれといった定説はなく、『宇治拾遺』の成立年代はおよそ鎌倉時代初期であり、敵密にはさらにその前後(十二世紀後半～十三世紀初期)の時点にあたり、それ以上規定することはむずかしい現状である(『日本古典文学全集』『宇治拾遺物語』解説)。

いちおう右のような成立時期を仮定して時代背景を少し見てみよう。

平家滅亡(一一八五年)、源頼朝鎌倉幕府を開く(一一九二年)、源氏滅亡・北条氏執権政治(一二一九年)、承久の乱(一二二一年)と権力の交替が相次ぎ、いわば「動乱の世」である。

また、鎌倉時代の文学は、その時代を反映し、多方面にわたって様々に展開している。簡単に通観してみよう。

擬古物語—古代貴族が没落し武士が台頭するとともに貴族文学も衰退したが、なお、前時代の物語を模倣した尚古趣味的・懐古的な『住吉物語』『松浦物語』などが作られた。

随筆—動乱の世の中の生きる支えとして仏教が広く民衆に浸透した。その無常観や自我意識を主潮として『方丈記』『徒然草』が出た。

歌集—戦乱をよそ目に、宮廷貴族の芸術至上主義にのっとりて美の世界を作り上げた『新古今和歌集』『玉葉集』などの歌集も

軍記物語—合戦を中心とした行動主義の歴史文学である軍記物語は、すでに平安末期からあらわれていたが、語り物という文学

形態をとった『平家物語』などを生み出した。

このようにそれぞれの文学がそれぞれの立場で豊かに花開いている。まことに中世らしい、広い深い世界を感じさせる。

説話の形態をとる『宇治拾遺』も、この中にあってひとつの個人的な立場をもっている。春田宣氏は『宇治拾遺物語』の方法』（角川書店『鑑賞日本古典文学』第13巻所収）において述べておられるが、『宇治拾遺』の中に見られるものは「中世の明るいおおらかな面」であり、「人々の笑いさざめく世界」である。また同書は、『宇治拾遺』が戦乱からの話題を取り上げていないことを指摘しておられるが、これは同時代に成立した鴨長明の『方丈記』とは対照的である。

『方丈記』は無常観で知られている。「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖とまたかくの如し」という冒頭は、人の世のはかなさを象徴する名文である。相次ぐ災厄によって人と栖の無常をしみじみと感じた筆者は、遁世生活の中に安らぎを見出した。現世を仮の世とする否定的立場に立っているのである。未聞の戦乱と、火災や地震、飢饉など、世の中が揺れ動き不安定であることが、この文学に暗い影を落としていないことは否めない。

だが同じ災厄を受けながら、『宇治拾遺』の中で人々は笑いさざめている。動乱の世にあって多少なりとも時代の動揺を反映している他の文学との対比によって、『宇治拾遺』のおおらかさはますますくっきりと浮き彫りにされるのである。

二、編者について

『宇治拾遺』の編者は未詳である。

『宇治拾遺』の「序」といわれる書き出しの一節には、『宇治拾遺』成立の次第が述べられている。

大納言隆国という人が年をとってから暑さを厭うて平等院の一切経蔵の南の山際にある南泉房という所に籠っておられた。しまりのない格好をして涼みながら、往来する者を身分を問わず集めては昔話をさせ、それを草紙に書きつけなされた。これを『宇治大納言物語』と言い、世間の人はおもしろがってこれを読んだ。のちにこれにもれた話を拾い集め、その後のことなども書き集めたものが出来た。これを『宇治拾遺物語』という。

こんな内容である。

しかしこの序とて最後は「宇治にのこれるを拾ふとつけたるにりや。また侍従を拾遺といえは、宇治拾遺物語といへるにや。差別しがたし。おぼつかなし」と結んであり、実に頼りない。しかも、隆国が編者であるとする説は、今日否定的な目で見られている。ここに名の出ている『宇治大納言物語』は現在その姿をとどめていない佚書である。

こんなふうに考えてくると、この序文の存在はなんとなく滑稽である。『宇治拾遺』の由来を説明しようとして、し得ていない。序文がなくてはかっこうがつかないから、と、くつつけられた感さえある。

このあいまいさには、しかし、独特の暖かみがある。普通の序文

に見られる形式ばった解説ではない。自分もよくわからない、と最後に素直に白状している点など、ほほえましいような親しみ深さが漂う。『宇治拾遺』という名の由来はともかく、世の人におもしろがられた興味深い話がいっぱいありますよ、という感じの序である。独特な世界的一端が、すでにのぞいてるとはいえないだろう。

三、編集方式―成立過程について

『宇治拾遺』の編集方式は△雑纂▽だとされている。

△類纂▽とされている説話集には『今昔物語』がある。『今昔物語』は、天竺の部五卷、震旦の部五卷、本朝の部二十一卷、と三つの部三十一卷に内容が整然と統一されている。

それに比べて『宇治拾遺』は、次々にいろんな話が飛び出して行く。「序」に「天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちに貴き事もあり、をかしき事もあり、恐ろしき事もあり、哀なる事もあり、きたなき事もあり、少々は空物語もあり、利口なる事もあり、様々やうやうなり」とあるが、まさにその通りである。

例えば第一話は道命阿闍梨という色好みの僧が和泉式部のもとに通った時、夜半に眼ざめて法華経を読んだ、それを道祖神が盗み聞きしたという、芥川龍之介の「道祖問答」の原典となった話である。次に来る第二話は、平茸のたくさん生える篠村という所があったが、ある夜里の者の夢に髪ぼうぼうの坊主が現れ別れを告げたと

見えたら、その後さっぱり平茸が生えなくなったという話である。そして第三話は有名な「こぶとり爺さん」の話である。三話だけであるが、一見した所、話と話との間の関連性は全く見あたらない。

百九十七話、終始この調子である。時には「連続した二話または数話の間に連想によつて素材や発想法が推移発展しているのではないかと認められる場合も」ありはするが、「しかし、結局この程度の類聚性からは、編者の本書構成の指標を読み出すことは困難であつて、やはり本書は雑纂のままに、次々に移り変わる話題に耳を傾けつつ先へ進むという読み方がよろしかろうと思つたのである。」(『日本古典文学大系』解説)

類纂形態の説話集の成立過程は容易に想像できる。編者が今に伝わる様々な書物や口語りの昔話などから地藏靈驗譚や観音靈驗譚を集め、盗賊や天狗の話を積み重ねて、それぞれの巻を編んでいったのであろう。

だが△雑纂▽となると成立過程は謎に包まれる。『宇治拾遺』の編者はどういう意図があつたかのように説話を並べたのか。それとも全く意図などなく無造作に配列しただけなのだろうか。

もう一度「序」を見てみよう。

「この大納言は降園かたくだにといふ人なり。……

目を結びわけて、をかしげなる姿にて、葎むしろうたを板に敷きて、すずみ居待りて、大きな打輪うちわをもてあふがせなどして、往來ゆきの者、上下をいはず、呼び集め、昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るにしたがひて、大なる双紙さうしに書かれけり。」

ここに「語るにしたがひて」とあることから、集まった者の話した

順序で配列したとの仮説も成り立つ。しかしこれは、「序」を信用するならば、という条件がつく。

ここで益田勝実氏の「中世的諷刺家のおもかげ——『宇治拾遺物語』の作者——」（『文学』34巻）の内容を紹介して考えてみたい。

益田氏は、『宇治拾遺』の第一話から第八話までを取り出し、それらがどのような関連性を持って配列されているか「連想の糸」をたどることによって、中世的諷刺家としての『宇治拾遺』作者を把握しようとしてきている。

まず第一話「道命和泉式部の許に於て読経し五条の道祖神聴聞の事」は、大納言藤原道綱の子、道命阿闍梨の物語である。「今は昔、道命阿闍梨とて、傳殿の子に、色にふけりたりける僧あり。」この好色僧が和泉式部のもとへ通った時、夜半目ざめて法華経八巻を読んだ。暁がたまだろもうとすると人の気配がする。誰かと問うと五条の道祖神であった。道祖神は、あなたが身を清めて経をお読みにする時は梵天・帝釈などが聴聞され、とても私など近づかずきまもなかったのだが、今夜は女犯不浄のからだで読まれましたので梵天・帝釈も聴聞なさらず参上することができました、「生々世々、忘れがたく候ふ」と言う。だから、かりそめであっても、身を清めて読み奉るべきである。

次の第二話「丹波国篠村平茸生ふる事」。丹波国の篠村という所のことである。ここには長年平茸がたくさん生えていた。村の者はこれを取って食い、人に贈りなどもしていたが、ある夜里の主だった人の夢に髪のをびた法師が二、三十人出てきて、縁がなくなつたのでよそへ移ると言つたと見えてのち、さっぱり平茸が生えなくなつた。

った。この話を聞いた仲胤僧都という人が、「これはなんと。不浄の身で説法する法師は平茸に生まれ変わるといふことがあるの」と言われたということだ。

女犯不浄のからだで読経した道命阿闍梨、平茸に生まれ変わった不浄説法の法師……この二話には△不浄動行▽という関連性が認められる。編者は一話を語ったあと△不浄動行▽の連想の糸をたぐって二話を思いついたものらしい。さらに編者はその第二話を「されば、いかにもいかにも、平茸は食はざらん事に欠くまじきものとぞ」と結んでいる。きみの悪いものは食うな、の結論は、編者に次の話への糸口を与えた。

第三話「鬼に瘤取らるる事」有名な「こぶとり」の話である。昔、右の頬に大きなみかんほどのこぶのある爺さんが、薪をとって暮らしていた。ある日山の中へはいつていった所、雨風がひどくて帰れなくなり、やむなく木の洞穴に泊まることになった。そこへ、赤い黒いの、一つ目の、口なしの、いろいろの鬼どもが百人ばかりやってきて酒盛りをはじめた。爺さんは恐ろしさにぼうっとしていたが、鬼たちの踊りが調子よさそうなので楽しくなり、踊ってみたくて仕方がない。えい、ままよ、死んだら死んだでいさど穴から飛び出して走りまわって舞つた。鬼どもは爺さんを気に入って、明日も来いとこぶを質にとってしまった。隣の爺さんは左頬にこぶを持っていたが、この話を聞いて自分も、と思ひ、同じ洞穴で待っている鬼どもが来て早く舞えと言ふ。しかしこの爺さんは不器用で、まずく踊つたので、鬼は怒って、質に取つてあつたこぶを「返してやるぞ」と投げつけたので、両頬にこぶのついた爺さんになつた。

てしまった。

山に生えたきみの悪い平茸から、山中に出る恐ろしい鬼どもへ。第二話に第三話は八山中の怪異▽という連想の糸でつながっているのである。

「こぶとり」の話は、右にこぶのある正直爺さんと左にこぶのあるいじわる爺さんとあらわれた八性のよしあし▽の糸によって、次の話を引き出している。

第四話「伴大納言の事」。伴大納言善男は若き日に西大寺と東大寺とをまたいで立ったという夢を見た。妻に話した所、妻は「あなたの股が裂かれようとするのでしよう」と夢判断をした。恐ろしく思いながら、主人の佐渡国の郡司の家に行くと、郡司は善男に向かってこう言った。「おまえは高相な夢を見たのだ。しかしそれをつまらぬ者に話してしまった。そのため必ず将来高位には昇っても罪をこうむるようになるぞ」。果たして、この郡司のことばにちがいはなかった、という話である。善男とその妻の性の悪さが善男自身の出世の道を閉ざしてしまつたのだ。

この話は八言いあて▽という連想で五話につながっている。善男の妻の言いあてはつまらぬものだったが、さて……。

第五話「随求陀羅尼籠むる法師の事」。これも今は昔、食料を求めてやって来た法師があつた。見るとその山伏の額には生々しい二寸ほどの傷がある。どうしたのかと聞くと、尊げな作り声で「これは随求陀羅尼を籠めたるぞ」と言う。それを聞いて皆たいしたものだと感心しあつていたが、そこへふと十七・八の小侍が走り出て来て言った。ああ笑止千wan坊主よ、なんで随求陀羅尼など籠

めるもんか、その傷は人妻とひそかに臥していた現場を夫に見つかり歟で割られたものだ、と事実をズバリと八言いあて▽なのだ。集まつていた者どもは一度にわあつと笑い、そのすきに山伏は逃げた。この話は八言いあて▽という連想で第六話「中納言師時法師の玉莖検知の事」とつながっている。

益田氏はこのようにして八話まで「連想の糸」をたぐつていかれた。同氏は、冒頭の八話のみでなく、第九話から第一九七話もこのように考へてゆくことが可能であるように思う、と述べられている。ただごちゃごちゃと並べてあるようにしか見えなかつた「宇治拾遺」の配列が、「連想の糸」によつてつながつた。これは一体どういうことを意味するのだろうか。

「角度を変えては、物語る話をつかみ直し、見直しして、次の話呼び起こしていく手法は、人の話を聞きながら、語り手とや違う関心で受けとめ、自分の話をそれに継いでいく八巡り物語▽的な場から生まれるものであろう」。

説話と説話との「連想の糸」をたどる時、それまで無意味であつた説話と説話との空間に重大な意味が隠されていることがわかつた。それは説話が語られる間に行われる「主題の転換」である。

第一話は道命阿闍梨の尊さが興味を中心となつて語りはじめられた。が、途中で道命の色好みな面に重心が移り、不浄説法の戒めで終わっている。第二話は不浄説法といえどこんな話もある、と語りはじめられ、不浄説法する僧は平茸に生まれかわるそう、平茸とはきみの悪いものと結論される。山の中には平茸だけでなく鬼

も出るぞ、と語りははじめられる第三話「こぶとり」、これは左こぶの爺さんの出現によって二人の爺さんの人柄に興味が移される。話の重心が、語りはじめから語り終わりまでに完全に転換されている。編者は重心を変え変えしながら「話をつかみ直し見直しして」次々に物語を進めていくのである。

この自由奔放な思考の流れは『宇治拾遺』の大きな特徴の一つであり、類纂の『今昔物語』などから感じられるものとはちがって、人間味があり、一話一話に血の通った感じをかもし出す一大要因となるものである。

その「人間味」「血の通った感じ」こそ、「宇治拾遺の世界」なのである。

雑纂という形態であるために、どのような過程を経て成立したのか、どうしてこんな配列になっているのか、という疑問が生じていた『宇治拾遺』であるが、益田氏の「中世的諷刺家のおもかげ」は「連想の糸」による配列の吟味によって「巡り物語」という成立過程を導き出した。

「序」は、往來の者が集まり隆国をかこんで昔話をした、と記していた。ある者が一つ話をする、他の者が自分なりにその話を受けとめ主題を転換し、連想によって次の話を語る。人々はそれぞれに感動し、笑い、戒められ、草紙が増えてゆく。情景が生き生きと目に浮かんでくるようである。

「巡り物語」であるとする説が正しいかどうか確かめる術はない。だが、「巡り物語」形式で語られた話を収録したものを原典として後人のつけたしや、先行説話集からの書承なども加え今日の

『宇治拾遺』の形式になった、と考えることも十分可能であり、そう考えることによってこれまでただの雑纂であった配列が全く姿をかえ、私たちの前に新しい「宇治拾遺の世界」として姿を現わしてくることは、大変興味深い。

四、文学的統一性について

『宇治拾遺』の「序」から注目したいことの二つめである。

「序」には、「さかしき人々書き入れたる」「大納言より後の事書き入れたる」「今の世にまた物語書き入れたる」などとあり、編者が一人でなく、後人の書き入れた話も多いとしていることは注目に値する。「序」の信憑性は頼りないといえるものの、所収の話は時代の幅も広く種々多様な内容を持っているし、複数の人による編纂の可能性は大いにあり得る。「巡り物語」形式で編纂されたとするならなおさらである。むしろ編者を複数と考える方が自然かも知れない。

「伝承文学において、『作家』を問題にしたり、編者の豊かな創造や個性的な表現を求めることは見当違いでさえもあろう。伝承文学は作家の主體的な観照性の流露とはおのづから対極にある文学といえるし、後人の増補加筆のまぎれこみ易い形態であり、『宇治拾遺』にもそれが言い切れない。

それにもかかわらず『宇治拾遺』には、口語的な表現と口誦的な発想に貫ぬかれたある文学的統一性があることを認めずにはいられない。」（『日本古典文学大系』解説）

編者を複数であると仮に考えておくと疑問になるのがこの「文学的統一性」である。

「集められた説話のかげに、一人の『創作主体』ともいべきものを設定せずにはいられなくなるような発想法がとられていて、そこに一種独特の文学のにおいがある」(同)

一話には一人の人間から発せられたごとくに統一された文学性が潜んでいる。その文学性は『宇治拾遺』の発想法にもとづいたものである。一人の創作主体を設定せずにはいられなくなるような発想法——その秘密を探り、「宇治拾遺らしき」を考えてみたい。

先に八類纂Ⅴの説話集として『今昔物語』を例にとり、『宇治拾遺』と比較してみた。だが『今昔』と『宇治拾遺』との間には編纂形式よりほかにもっと大きな違いがある。

『宇治拾遺』の第一話「道命和泉式部の許に於て読経し五条の道祖神聴聞の事」については先に紹介した。主人公道命阿闍梨は「今昔」にも登場する。「天王寺別当、道命阿闍梨語」(巻十二の三六)がそれである。

『今昔』の巻十二は、法会ほうえの縁起と諸仏・『法華経』の靈驗譚ばかりを集めて編まれた巻であり、道命も尊い持経者の一人として登場し、「幼ニシテ山ニ登テ仏ノ道ヲ修行シ、法華経ヲ受持」し「其ノ音微妙ニシテ、聞ク人皆首ヲ傾ケ不責ズト云フ事无シ」と語られている。道命の法華経を読む声のすばらしさや読経の靈驗あらたかな様子の尊いこと、この上もない。『今昔』の編者は道命をすぐれた持経者という面でのみ捉え、道命の話を『法華経』の靈驗譚の

一つとして組み込んでいるのである。

『宇治拾遺』の道命はまるで別人である。好色で、和泉式部と交渉を持っている。かりそめに読んだだけの『法華経』が五条の道祖神に「忘れがたく」思わせたほどすばらしいことは述べているが、『宇治拾遺』編者の関心は、持経者としてよりも八不浄動行Ⅴした好色僧としての道命に向けられている。

また、道命の紹介のし方にも両者それぞれに特徴がある。

まず『今昔』には、「今ハ昔、道命阿闍梨ト云フ人有ケリ。此レ下姓ノ人ニ非ズ、傳ノ大納言道綱ト申ケル人ノ子也。天台座主慈恵大僧正ノ弟子ニナム有ケル」とある。下姓の人物ではない、れつきとした大納言の子である、出家後も一流の僧正に弟子としてついていた、というのである。

大体にして『今昔』には、説話に登場する人物についてその出自・承譜・時代・場所等、細事にわたってできるだけ詳しく記述しようとする姿勢がみられる。「史実の記録」という立場をとり、人名や地名などがはつきりしない場合には、それに当たる部分を□にして残しておいているほど徹底している。『今昔』が事件中心と言われるのもこの史実性重視の記述方針ゆえである。

『宇治拾遺』の方は、「今は昔、道命阿闍梨とて、傳殿の子に、色にふけりたる僧ありけり。和泉式部に通ひけり。経をめてたく読みけり」となっている。道命の素性をあらわす言葉は「傳殿の子」だけだし、読経のすばらしさもほんの一言しか言っていない。編者にとって道命の身分など関心の外であるかのようだ。

一般的に『宇治拾遺』は人物の素性や場所の名などを明らかにす

ることあまり力を入れていない。それよりも早く享受者を物語の中へ引き込もうと話の筋立てを急いでいる姿勢が見られる。登場人物の素性よりも、その人のとった行動、その人の人柄などに心ひかれていた様子うかがえるのである。『今昔』の事件中心に対して、人物中心と言われるゆえんである。道命の好色僧としての面を強調しようとする『宇治拾遺』と、道命の持経者としての面及び『法華經』の靈験を強調しようとする『今昔』とは、根本から発想が異なっていると言えらるであろう。

同じ人物であるのに、『宇治拾遺』は持経者としてでなく好色僧として捉えた——この「人物の捉え方」に『宇治拾遺』の独自性を見出せはしないだろうか。

先に紹介した第五話には、額に随求陀羅尼を籠めたと虚言した山伏が登場した。この話は、小侍に「あの額の傷は、人妻を寝とった現場を見つけられて歟で割られたのだ」と事実を言いあてられた時、その山伏は平気な顔で「そのついでに籠めたるぞ」と言い、人々が「一度にはと笑ひたる紛れに逃げ去りにけり」と結んである。

いかさまの山伏であったのみならず、ウソが露見してもそ知らぬ顔で「そのついでに籠めたのだ」などよくも言えたものだ、はなはだけしからん、とか何とか批判してもよいのに、この話は、人々が笑っているうちに逃げてしまった、で終わっているのである。一言も責めてはいない。編者もその現場にいた人々とともに、山伏の滑稽でどことなく機転のきいたセリフに笑いころげ、山伏の逃げるまま許してやっているようである。男を「いかさまの山伏」でなく「とぼけた男」ぐらゐに捉え、語っている感がある。これが『今昔』

であつたら、いかさまの山伏をしめあげてもする所であらうか。いや、それどころかこの話そのものを『今昔』は取り上げなかった。この大らかな笑いは『今昔』の世界には入れない。『宇治拾遺』の世界のものであるから……。

『宇治拾遺』には、愚かな言動をとる笑いあざけるべき人物を寛容に許してやる話が多い。

第一〇九話「くうすけが仏供養の事」に登場するくうすけは、仏師をあざむいて仏を造らせ、講師をあざむいて開眼供養をさせた人物である。お礼の品物はこれこれです、と仏師に上等な物ばかり見せておいて、出来上がってから差し上げると偽って仏を造らせた。立派なものが完成したので御馳走いたしましたしょう、と用意するふりをして、くうすけは自分の妻一人を仏師のそばに残して立ち去る。しばらくして太刀を抜いてやって来て、「おまえは私の妻を寝とったな」と言い掛りをつけ、切りかかって追い出してしまふ。くうすけのやり方は実に周到である。講師などは他にも仕事のくちがあつたのを断わってまでくうすけの所に来たのに、うまく言いぐるめられ、夢の中で金持ちになつたようなふわとした気持ちで帰って行つた。こんな悪事をはたらいたくうすけに対して編者は、「かかりとも少しの功德は得てんや。いかにあるべからん」と結ぶだけで、あまりにも見事なだましつぷりにあきれ、どんなものだらうか、と苦笑しているようである。

第一三三話「空入水したる僧の事」では、いかさま聖が登場する。桂川に入水して往生を遂げるといふ聖がいた。人々は尊がって、一目見ようと押しあいへしあいして集まつた。ところが聖はぐ

ずぐずしてなかなか入水する気色はない。見物人の中には帰る者も出て、人が少なくなつた。そこへいよいよ聖は、ふんどしひとつになつて入水しようとするが、縄に足をとられてごぼごぼとおぼれてゐる。見物人の一人が助けてやると、手をすり合わせて礼を言い、一目散に逃げ出した。見物人たちが怒つて石を投げつけたので、聖は頭を割られてしまった。まことに情けない法師である。そんなどうしようもないやつ、放っておけ、とでも言いたい所だが、『宇治拾遺』編者は、「この法師にやありけん、大和より瓜を人のもとへやりける文の上書に、前の入水の上人と書きたりけるとか」という形で許してやっている。

第三話の「こぶとり」に登場する左こぶの爺さんが鬼にこぶを投げつけられた時も、「うらうへに瘤つきたる翁にこそなりたりけれ」、両方にこぶのついた爺さんが出来上がつてしまった、と幾分同情を込めた表現を用いているし、結びの「物羨みはせまじき事なりとか」も、強い戒めの言葉という感はない。

第七九話「ある僧人の許にて水魚を盗み食ひたる事」もおもしろい。ある僧が人のもとへよばれて行くと、珍しい水魚というものを出示してくれた。主人が用事で奥へはいり、またもどつてみると、水魚がことのほか少なくなつてゐる。変だと思つたがそのまま雑談してゐると、僧の鼻からふと水魚が一匹飛び出てきた。どういうことですかと言うと、僧はすかさず、「この頃の水魚は目鼻から降つて来るものですよ」と言つた。この盗み食いした僧も、「人皆、はと笑ひけり」の結びで、笑いにまぎれてしまつてゐる。

これこそ『宇治拾遺』の世界である。「人間とは結局このよう

ものなのだとする寛容の態度と静観の姿勢で、一種のあきらめにも似た健康な笑いの世界を形成している」(『日本古典文学大系』解説)のである。

宮田匡子女史は「宇治拾遺物語——構成とその世界——」で『宇治拾遺』と『今昔』を比較して次のように述べておられる。

「人間性の把握に於ける二つの視点、それは理性に支持され、思想という地盤から育つてきた厳格な視点と、感性に主として裏打ちされた日常性に基づく人間礼賛的な視点である。

前者のもつ強さは、日常の実感感覚の中に安住する精神を否定し、何故かという問いかけと、ではどうあるべきなのかという問いかけのくり返しに於いて、意欲的かつ積極的に人間性の本質究明を志向する。そこに求められるものは、人間存在の峻厳であり、崇高なる理想像である。これに対して後者は、現に存在する人間像をそのまま容認する。否定的契機に導かれた容認ではなく、人間を肯定的に把握することに基づくものである。何故かという問いは発せられず、何故かと問いかける以前の段階に於いて「人間とはかくなるものである」「かくなるが故に、人間は人間なのである」と呑み込んでしまふのである。」

前者が『今昔』、後者が『宇治拾遺』であることは言うまでもない。人間を厳しく見つめ人間追求をしていく姿勢の真摯さでは、『宇治拾遺』は『今昔』に劣るだろう。だが、人間の弱さを理解し、受け入れる包容力という面から見ると、『宇治拾遺』の方が上ではないだろうか。

どんなに「崇高なる理想像」を追い求めてみたところで、人間は

所詮弱いものであり、時にはその弱さをさらけ出して、愚かなことをしてしまふこともある。そんな時その弱さを嘲ることはやめて「あきらめにも似た健康な笑い」の中におし包んでやる。これが出来たのは『宇治拾遺』が人間をよく理解していたからである。人間理解こそが「宇治拾遺らしさ」をかもし出す源だったのである。

結 論

春田宣氏が「『宇治拾遺物語』の方法」(鑑賞日本古典文学)所収)の中で「…読んでみるとたしかにおもしろい。…あの『源氏物語』などを読む場合の緊張感や神経は使わなくてすむ。読んでいてすつと通るのである」と、『宇治拾遺』の読み易さを述べておられる。

『宇治拾遺』の世界は、私たちの弱さを認めてくれる、肩の凝らない世界であった。だが決して弱さに甘んじて墮落まで認めるわけではない。まあいいではないか、それなりにがんばろう、という大らかな励ましの世界であった。

それがわかった今、ますます『宇治拾遺』の世界の、はかり知れない深さ、広さを感じずにはいられない。動乱のさなかにありながらこのような世界を形成し得た『宇治拾遺』に、そして中世という不思議な時代に、その時代を生きた人々に、あらためて驚嘆し、感動するのである。

これでは『宇治拾遺』の謎はいよいよ深まるばかりだ。しかもそれは、人間の根源にまで達する深い深い謎である。——が、私はもは

やその謎を追究することにあまり価値を感じない。『宇治拾遺』は、時代を超え、空間を超えて、私を中世に引き込んでくれた。私は、いかさま聖のまわりをとり囲んだ人群の一人となつて、共に腹をかかえて笑うことができた。それだけで十分ではないか。時間・空間を超えた感動が味わえる所に『宇治拾遺』の真の文学的価値がありはすまいか。——だとしたら私たちは『宇治拾遺』に対して、「論ずる」よりも「共に笑う」という姿勢をとるのがよいのではないか、と思うのである。人間の弱さを理解したい、また、理解してもらいたい、と願っている最も弱い人間は、私かも知れないのである。

参 考 文 献

『宇治拾遺物語』日本古典文学大系

岩波書店

『宇治拾遺物語』日本古典文学全集

小学館

『宇治拾遺物語』編者の「目」について」池辺実

『文学研究』昭四八・七月号

『宇治拾遺物語』の批判意識について」池辺実

『文学研究』昭四八・二月月号

「建久御巡礼記を論じて宇治拾遺の著述年代に及ぶ」後藤丹治

『文学』昭三六・九月号

「今昔物語集・宇治拾遺物語」鑑賞日本古典文学第13巻

角川書店

「中世的諷刺家のおもかげ——『宇治拾遺物語』の作者——」

益田勝実『文学』昭四一・二月月号

「宇治拾遺物語の世界」永積安明 『文学』昭三九・一月号
「宇治拾遺物語」構成とその世界——宮田匡子

『国語国文』昭四九・二月号

「古事談と宇治拾遺物語の関係——徹底究明の為に——」

益田勝実 『日本文学史研究』昭二五・七月発行

「宇治拾遺物語と先行説話集——その一部としての今昔物語集及び

古本説話集との関係——」国東文麿

『中世文芸』昭三三・五月発行

「宇治拾遺物語の成立について

——散佚宇治大納言物語・今昔物語との関係——」野口博久

『言語と文芸』昭三八・一月号

「中世的人間像——宇治拾遺物語「狂惑の法師」の解釈から——」

田口和夫 『説話』昭四三・六月号

〔評〕

本論文は、「研究」という見地よりするならば、必ずしもすぐれたものではない。何故なら、その分析の大方は先学の論にたよっているから。端的に言えば先学の論をほとんど越えていないのである。しかし逆に言えば、先学の論によって、深く宇治拾遺の世界に参入することができている。いわば、先学の論を自己の消化液として、宇治拾遺の世界を自分の血肉にすることができている。これは真の研究の第一歩である。その第一歩を正しく、しっかりとふみ出し得たことに敬意を表するものである。

(重見一行)

国文学会 消息

。昭和五十六年度より新刊、今後継続刊行予定の「国文学年次別論文集」(朋文出版)の本年版(昭五十六年)の中古文学の部に、たまゆら第十二号所載の次の四論文が採用されることとなった。この論文の刊行は、国文学界の先学諸賢も推せんところであり、本国文学会にとって、まことに慶賀すべきことと思われる。

「おもほす」についての考察 山本敦子氏

「伊勢物語」にける在原業平像 鳴田圭子氏

「蜻蛉日記」に見られる作者の生き方について 保澤奈津氏
堤中納言物語の研究

——「虫めづる姫君」を中心に—— 室坂恵美子氏

。昭和五十六年四月一日付をもって、広島大学部国文科助手吉山裕樹氏を専任講師としてお迎えすることとなった。専攻は平安朝文学。

。副手山下園美氏・近沢恵子氏の御結婚退職にともない、昭和五十六年四月一日付をもって本学本年度卒業生原山啓子氏・井原浩美氏をお迎えすることとなった。

。新校舎D棟の完成にともない、国文科は講義室・教官室共に新学舎に移転した(昨年九月)。眺望と身体の鍛練に最高の条件を備えている。